

保育者の力量形成における保育の省察について

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
辻本 千晶

実習責任教員 藤井 伊佐子
実習指導教員 木下 光二

キーワード: 幼児教育, 力量形成, 省察, 保育の質

I 問題と目的

1 幼児期の教育における問題

昨今では、幼保一体型認定こども園の施行や待機児童問題など、幼児教育においては大きな変革の時期である。社会、保護者のニーズへの対応が進められる中で、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担う幼児期における保育の質の保障、保育者の専門性や力量が問われている。

2 園の課題

昨年度、本園のアセスメントを行った結果、「指導計画や幼児の姿は理解できるが、何をどうすれば、保育がよりよくなっていくのかが分からない」や「記録を書いても、書くことに重点を置いてしまい、そこから次の保育や幼児へのかかわりが読み取れない」また、「保育の中で自分のクラスの課題や問題点・悩みなど、職朝などで話に上がるが、その問題についてどのように向き合えばよいか、具体的な方策など見えにくいところもある」という悩みが挙げられ幼児や保育の課題は見出せるものの、そこでとどまってしまい解決に至れていないことなどが明らかになった。

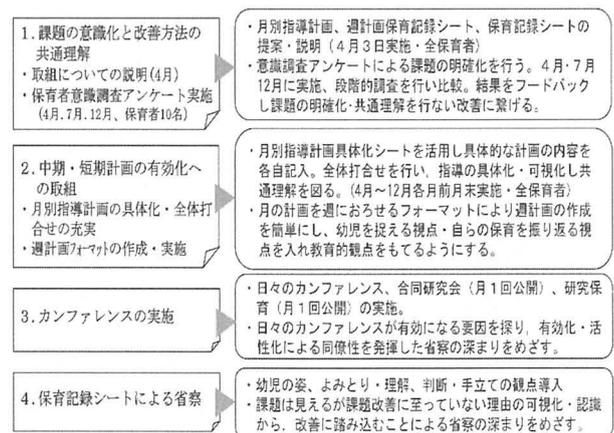
3 目的

計画や作業の形式的な段階でとどまらず、本質的な部分に踏み込むための保育の省察・実践のあり方の見直しが必要である。そこで保育者自身による幼児や保育へのよみとりの深まり、

記録による保育の省察、保育計画（中期・短期）作成の連続性を促し、日々の改善を図ることにより、省察の深化を追求し保育者としての力量の形成や向上をめざす。

II 実践研究の方法

以下の表1の通り、1. 課題の意識化と改善方法の共通理解、2. 中期・短期計画の有効化への取組、3. カンファレンスの実施、4. 保育記録シートによる省察とし、計画をもとに実践を行う。



III 実践と結果

1 保育者意識調査、アンケート、力量調査の実施・結果

保育者の意識調査は4月初旬、7月初旬、12月初旬に実施し、結果を保育者一人一人にフィードバックした。普段は表面化されない個々の課題が可視化され、以下の取組を進め深める上で有効な意識化が図れた。

2 中期・短期計画の有効化への取組

(1) 月別指導計画具体化シート作成、指導計画全体打合せの実施・週計画シート作成

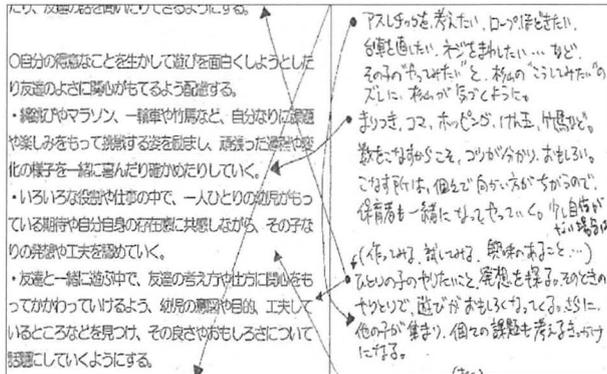


図1 月別指導計画と具体内容（一部抜粋）

指導計画と実際の指導が繋がりにくいという課題を受け、指導計画のねらいや内容を幼児の実態に合わせた具体的な指導が可視化できるシートを作成した。それぞれの保育者が具体的にどのような指導を計画しているかを可視化した。それをすべての職員に配付し全体打合せを実施し、それぞれの保育者の指導の方向性や内容が共有された。学校課題FW I 後に課題を再確認し、課題改善の手立てを「月別指導計画具体化シートの共有化」「全体打合せ時、意見や情報交換の活性化」「保育者一人一人が、話す時間に意識をおいた打合せ」「指導計画具体化シートを担当や各担当に合わせた項目への変更」とし、FW II では改善を図り実施した。

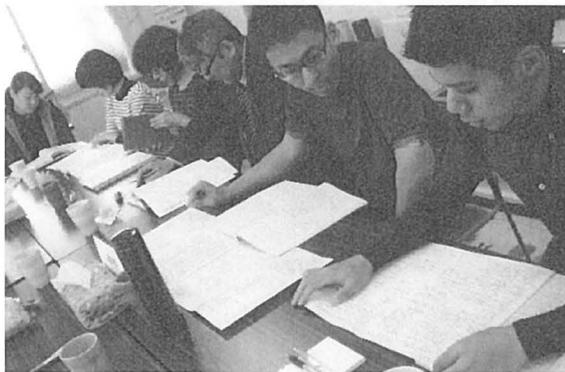


図2 月別指導計画全体打合せの様子

(2) 週計画フォーマットの作成、実施

月別指導計画の具体化を受け、週計画フォーマットを作成した。月別指導計画を週計画に貼り付けられるように簡素化を図った。月の指導計画が具体的に出されており、週計画を具体的にイメージしながら作成できるようになった。新たに設けた評価の視点では、ねらいと実践との整合性を意識した省察ができるようになっていく。

(3) 中期・短期計画の有効化への取組結果

中期・短期指導計画の有効化に向けた取組の結果、月別指導計画の具体化と全体打合せにおいて、アンケートにも有効性・必要性が記されていた。具体化・共有化を行ったことで、それぞれの保育者の指導の方向性や具体が他の保育者に可視化され、よりよい計画・指導に繋がっていった。実際の指導計画具体化シートからも明らかであるように、保育の具体的指導やその指導がめざすものが繋がっていることが分かる。しかし、月別指導計画具体化シートを作成する計画段階で安心・納得せず、具体化した計画を保育や幼児の成長発達にとって有効に繋げる必要がある。そのためには省察やマネジメントが繰り返されなければならない。具体化と共に保育者としての意識や姿勢を有効に保つことが重要であり、引き続き課題となる。

週計画作成についてのアンケートには、段階的に計画をおろす作業としては有効であるが、短期計画のより具体的な計画としては必要性が感じられにくいとの意見も出されている。

3 省察を深めるカンファレンスの実施

(1) 実践の内容

本園のカンファレンスの機会は、研究保育、合同研究会、日々行われるカンファレンスがある。このように機会はあり、「役に立つ」とは感

じるものの、「話をしても段取りや作業的な確認で終わる」「状況は把握できるが手立てに至らない」「有効なアドバイスや手立てができない」等、本質に踏み込めていない現状であることも分かった。今回の取組では、カンファレンスが有効になる要因を洗い出し、有効性を実感できるよう改善をめざした。

(2) 有効なカンファレンスの要因

学校課題 FW I では、カンファレンスを積極的に取り入れ、何をどうすればカンファレンスが本質的な部分に踏み込めるのかを探った。7月のアンケートには、「聞くことで保育が変わるきっかけを確かにつかむことができる」と記述されており、そこから「何を聞けば変わったのか」を探った。その結果、「幼児の姿から何をよみとったのか」「保育者の心の動きや意図を率直に、語り、聞くこと」が、具体かつ応答的であるとカンファレンスが有効と感じ、保育に活かされることが分かった。そのポイント(図-3)を意識しカンファレンスの実践を進めた。

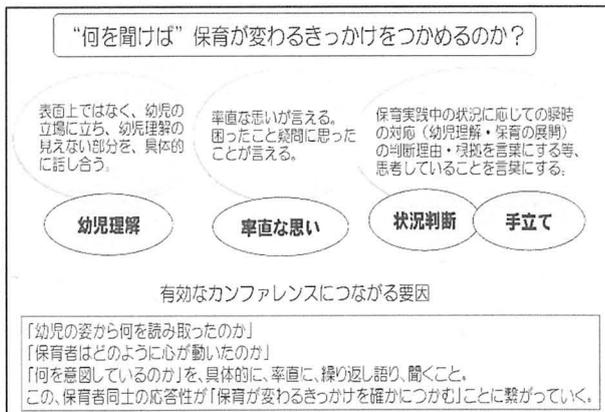


図3 カンファレンスが有効になる要因

(3) カンファレンスの実践結果

有効な要因を洗い出し実践を進めた結果、省察が深まり保育者同士が“よみとり”を具体かつ応答的に繰り返す中で、「意味がある」「保育に活かせる」「思考や意図を確認したい」とカンファレンスの有効性が実感を伴って語られた。

更に、そのような保育者の変容に周りが刺激を受け、「自分も変わりたい」「保育を充実させたい」という保育者の意識が掻き立てられていった。アンケートには、「アドバイスや意見を求める姿が毎日のように見られ、それをきっかけに保育者同士の話し合いが今年は非常に活発になってきていると思う」と記されている。保育者により個人差はあるがその有効な応答の繰り返しにより、保育者同士の同僚性や力量を形成していくことが実践から明確になった。

4 保育記録シートによる省察

(1) 新たな保育記録シートの実施

内容だけの羅列記録にならないよう、「実際」「よみとり・理解」「手立て」という観点を設けたシート(図-4)を新たに作成し実施した。

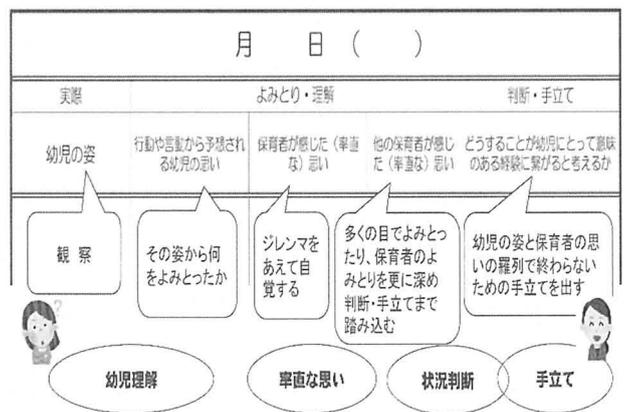


図4 保育記録シートの観点

実施した当初は、新しい取組であることと計画・作業の形式的な段階から本質的な部分への踏み込みへの難しさに、「書けない」「書く時間がない」「観定の枠があると書きにくい」という声が挙がった。その状況に対して園長が保育者としての意識や在り方を問い直すマネジメントを行ったことで、保育者それぞれに記録に対する意識や姿勢の変容に繋がった。カンファレンスが有効になると同時に、行ったことの内容の羅列記録ではなく、幼児や保育のよみとりや、カンファレンスを通じて出された手立てが記録

に残されるようになり、保育者の思考や応答が文字となり可視化されていった。

(2) 実践結果

保育記録シートに観点を設けたことにより、記述できる観点、記述できない観点が表出され、保育者それぞれのよみとりの課題が明確になった。記述されにくいのは、「行動や言動から予想される幼児の思い」「どうすることが幼児にとって意味のある経験に繋がると考えるか」の観点で、この観点は「幼児理解」と「判断・手立て」にあたり、幼児理解に踏み込めていないため手立ても講じられないということを表した。このように可視化することで省察の浅さを認識し改善に踏み込むようになり、それとともにカンファレンスも多く行われるようになった。省察が深められると記録も必然的に書けるようになり、保育者としての力量の向上に繋がっていったことが分かる。

課題としては、省察が深められる状況を維持することと、記録とカンファレンスは関連が強いが、カンファレンス内容が記録に反映されていない場合が多い。カンファレンス内容が記録に残るように手立てを考えていく必要がある。

IV 成果

1 力量形成調査から

4月と6月と11月に保育者自身が自分の力量についてのチェックを行い、省察を深める取り組みにより保育者としての力量にどのような変化を与えたのかを調査した。調査の結果では保育者10名のうち9名が、力量が向上したと自己判断・評価し、理由として省察が大きく影響したことが語られている。また、他者評価においても同様に力量が上がっているという結果が出ている。

2 12月に行ったアンケート記述から

「生活プラン(本園の教育課程)が土台にありそれに照らし合わせていくことで月のポイントや学級としてのテーマ、幼児一人一人の課題の手立てが見えてくるといった一連のサイクルを改めて認識できた」「自分の保育がこれで良いのかわからないまま保育していた以前より、自分が保育で困っていること等、自分の中ではっきりし相談することができるのでありがたいし、やりがいがある」と記述されており、プロセスの質から成果を実感していることが分かる。

今回の取組においては、保育者にとって自己課題に向き合い、改善に向かう努力を伴うこととなったが、取組の必要性については全保育者が、「必要である」とアンケートに記している。また、「大変だが有効である」「やりがいがある」という記述も多く、保育を追求した結果、達成感や充実感が残ったようだ。

専門性や保育者の力量は、「計画を立てること」「実践すること」「実践を省察すること」この過程の深化であると言われており、今回、本質的な部分に踏み込み深く省察した経験が、保育者の専門性に対する意識の高まりや、やりがいとなり、保育者の力量を形成していくことが明確となった。

V 今後の課題と展望

今後の課題は、今回の取組を組織の状態に合わせて保つことである。合わせることで形骸化にならないようにしていく必要がある。より具体化され、より思考され、より試行錯誤され、実践につながられると、保育や生活の奥深さに教育の意義や意味があることを実感し、それを追求しようとして更に深い流れを呼ぶ。この省察を深めるサイクルをいかに現場に存在させるか、現場に戻っても有効な取組を継続していきたい。